

日本農林漁業振興会会長賞受賞

出せ知恵を！掘り興せ現和の宝を！！

受賞者 現和校区
げんなんこうく
かごしまけんにしのおもてし
(鹿児島県西之表市)

■ 地域の沿革と概要

現和校区のある西之表市は、九州本土最南端の鹿児島県佐多岬から南東に約43 km、県都鹿児島市から約115 km の距離にある種子島の北部に位置している。海の玄関口である西之表港を有し、人・物の交流拠点として本土と種子島を結交通の要所となっている。

西之表市の面積は約206km²であり、1市2町からなる種子島の総面積の約45%を占めている。また、黒潮の影響などによって年平均気温は19度と温かく、亜熱帯気候に属している。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

現和校区は、西之表市の中心部から約7 kmの距離にあり、東側に太平洋を望む景観豊かな地区である。総面積17.6km²のうち、山林が約3割を占め、起伏が他地区よりも比較的少ない平坦な地域である。また、農地は平坦な土地に集まっており、総面積の約3割を占めている。

本校区は、9集落、約700世帯からなり、人口は1,408人と市内の全12校区の中では3番目の規模である。世帯の半数がさとうきびやさつまいも等を生産する農業及び畜産業に従事し、農家戸数及び耕作面積は12校区中1位となっており、西之表市における農業の牽引役となっている地区である。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落の集合体
地区の性格	地縁的集団
農 家 率 (内訳)	37.9%
	総世帯数 689戸
	総農家数 261戸
専兼別農家数 (内訳)	255戸
	専業農家 126戸
	1種兼農家 57戸
	2種兼農家 72戸
農用地の状況 (内訳)	耕地計 512ha
	田 97ha
	畑 409ha
	樹園地 6ha
	耕地率 29.1%
	農家一戸当たり耕地面積 2.0ha

（注）農用地の状況は、耕地面積を耕地面積と耕地面積の合計で割った値を表示しています。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機・背景

現和校区においては、第1次産業の低迷、農家の高齢化及び担い手不足、地域文化・伝統芸能の継承者減少、青年及び婦人組織の弱体化、児童数の減などの課題が深刻になる一方であった。

そこで、平成3年に地区の拠点となる農業構造改善センターが完成したことを契機に、それらの課題の解決に向け、「出せ知恵を！掘り興せ現和の宝を！！」を合い言葉とし、第1次産業の推進と地域文化の継承を柱とした「豊かで活力あるむらづくり」を開始した。

第1次産業の推進に向けた集落ごとの話し合い、地域文化の継承に向けた校区文化祭の開催などの様々な活動に取り組み、平成9年には鹿児島県の新・農村振興運動の重点地区に指定されるなど、むらづくりの先進地として活発な活動を行ってきた。

しかし、平成18年に現和中学校が廃校となったことや、その後の保育園の廃止決定により、地区内に「このままでは地区が衰退するのではないか」との閉塞感が漂っていた。

そこで、現和校区では、地域が一体となった地域活性化の対策が今まで以上に必要と考え、住民による話し合いを始めた。そして、今までのむらづくり活動に加え、少子・高齢化対策といった社会福祉面の活動にも力を入れることとし、住民が知恵を出しながら新たな活動に取り組むこととなった。



写真1 現和校区の皆さん

(2) むらづくりの推進体制

ア 現和校区

現和校区は、以下の推進体制図のとおり、農業振興推進協議会、社会福祉法人現和会、社会教養推進会議等から構成され、それぞれの組織ごとに特化して取組が行われている。

① 農業振興推進協議会

農業振興推進協議会では、園芸・さとうきび・畜産などの分野別に振興会を組織し、生産性の向上だけでなく、担い手育成や農地の保全などにも取り組んでいる。

② 社会福祉法人現和会

社会福祉法人現和会は、平成24年1月に設立された現和校区の住民だけで構成する組織であり、同年4月から「現和みどり保育園」を運

営している。

③ 社会教養推進会議

社会教養推進会議は、「校区高齢者支援協議会」、「地域文化部会」、「婦人生活改善部会」など、多数の組織で構成されている。

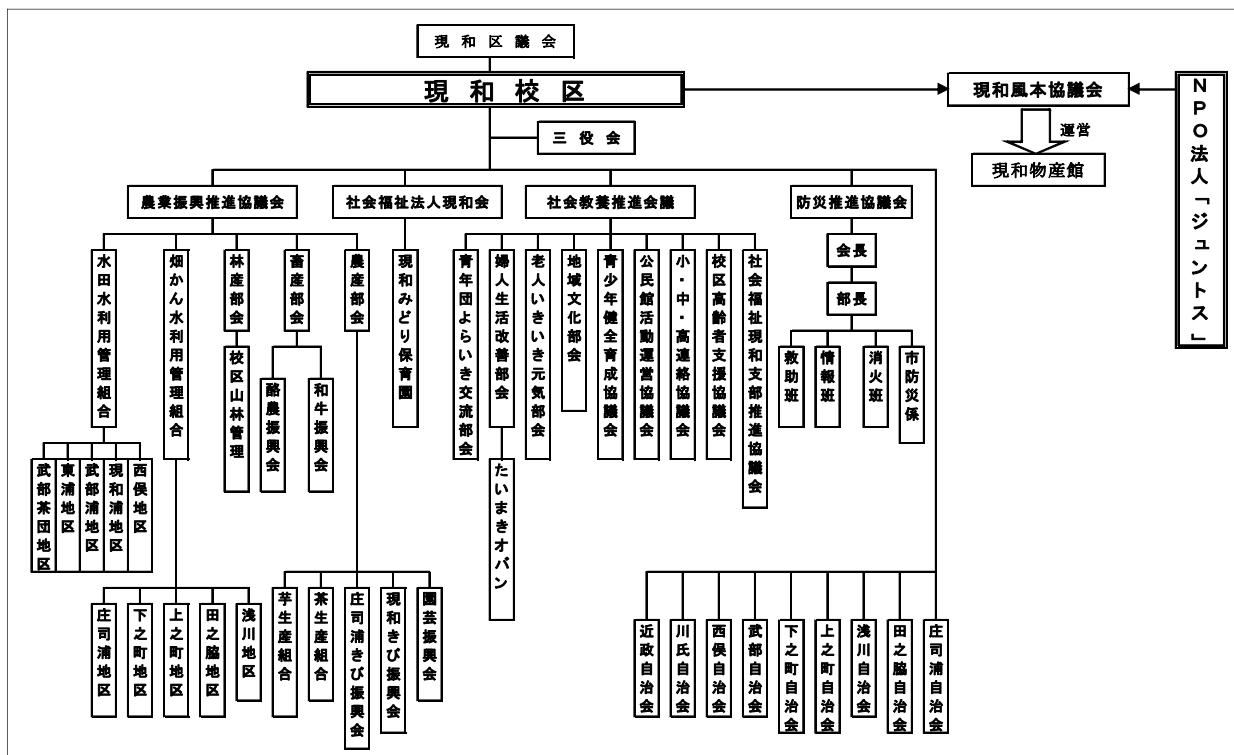
「校区高齢者支援協議会」は独居老人のサポートなど、「地域文化部会」は郷土芸能の継承などを担っている。また、「婦人生活改善部会」の中には、食文化の継承などに貢献している生活改善グループ「たいまきオバン」（現和校区を構成する集落の一つである田之脇集落（通称たいまき）の女性有志（オバン）という意味）があり、現和の宝の継承に大きく貢献している。

イ 現和風本協議会

現和校区は、地区内で生産される農産物の消費拡大、雇用の拡大等によって地域の自立と活性化を目指すことや、現和校区を校区外にPRすることなどを目的として、平成21年12月、現和校区から7km余り離れた西之表市街地に「現和物産館」をオープンした。

「現和物産館」の運営については、西之表市内で地域づくりに取り組むNPO法人「ジュントス」（ポルトガル語で「みんな一緒に」の意味）と連携して平成21年10月に設立した「現和風本協議会」により行われている。設立時の準備や宣伝など、現和校区の力だけでは不足する部分を補いながら、市内で唯一となる校区外での物産館の運営にチャレンジしている。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

現和校区においては、第1次産業の振興と文化の継承を目的としてむらづくり活動が開始され、中学校及び保育園の廃止等の課題を解決するため、活動の更なる強化を行って成果を挙げている。離島という厳しい地理的条件下にある中で、他校区に先駆けては場整備を実施し、農作業の機械化及び省力化などの農業を守るための取組を行うとともに、校区外での物産館の運営、伝統芸能や食文化の継承など、自分たちの故郷を守っていくという決意に基づき、地域が一体となった活動を行っている。

また、廃止が決まった保育園に代わり、校区自らが保育園を運営するなど、行政サービスを補う活動についても、知恵を出しながら自分たちの力で対処している。

さらに、本校区における活動については、自分達の生活を維持していくこうという覚悟を持って行われ、協働の仕組みが地域のすみずみまで機能しており、活動の結果、次世代への地域文化の継承がしっかりと行われている。

2. 農業生産面における特徴

(1) さとうきび収穫作業の受委託等による寄与状況

現和校区では、農業の将来を見据え、他校区に先駆けては場整備を実施し、農業の機械化及び省力化に取り組んでいる。特に、種子島の基幹作物であるさとうきびの振興に力を入れており、「さとうきびハーベスター生産組合」は平成8年から収穫作業の受託を行っている。

近年、作業受託については、高齢農家や小規模農家からの依頼を中心に増加しており、さとうきびの作付面積は平成17年から平成22年までの間に135haから171haへ拡大するとともに、産出額は214百万円から256百万円に増加している。

なお、ハーベスターの保有台数については、西之表市全体の21台のうち、現和校区だけで6台を所有しており、他校区の収穫作業を受託することを通じてさとうきびの振興に大きく寄与している。

また、近年評判の高い安納芋や県の認証を受けているスナップエンドウにあっては、園芸振興会の活動により生産が振興されるとともに、畜産にあっては、和牛振興会の活動により西之表市の畜産共進会で優勝するなどの結果が現れている。

さらに、現和校区において、認定農業者数は平成14年度から23年度までの間、21名から39名に増加するとともに、平成20年以降に7名が新規就農しており、農業の担い手が確保されている。

(2) 「現和物産館」の運営による農業生産面への寄与状況

「現和物産館」の売上額については、平成22年度は約1,800万円、平成23年度は約2,200万円、平成24年度は1日平均約8万円（年換算で約2,400万

円) となっており、順調に伸びている。

会員数については、オープン当初は40名であったが、現在では約300名に増加している。また、会員によっては、物産館における売上額が月平均で12～13万円に上っている。

物産館の運営により、少量・他品目の農産物を直接販売できるようになつたため、高齢・小規模農家を中心として農家の所得向上に寄与している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 現和物産館の運営

「現和物産館」は、会員の生きがいづくりなどの生活面の向上にも大きく寄与している。

島の玄関口の西之表港の近くにある空き店舗を活用したことにより、商店街の活性化にも大きく貢献し、既存のスーパーの店舗内に地産地消コーナーができるなどの波及効果も生じている。

また、会員の約3分の2は現和校区以外の住民であり、現和小学校の生徒の描いた絵を店内に掲示するなど、現和校区のPRの場としての役割も果たしており、物産館が西之表市全体にとって貴重な施設となっている。



写真2 現和物産館

(2) 現和の宝（伝統芸能・食文化）の継承

現和校区は、校区住民の心の拠り所である「風本神社」を中心とした数多くの郷土芸能の継承に尽力している。

子どもの減少や踊り手の高齢化に伴い、一時は存続が危ぶまれた芸能も多かったが、平成6年以降に開催している校区の文化祭において踊りなどを披露する場を設けるなど、集落単位での芸能の掘り起こしと保存に努めている。

また、地域文化部会が中心となり小・中学生に対する教育の一環として踊りの継承に取り組んでいる。この結果、現和校区においては、県の無形民俗文化財に指定されている武部集落の「種子島大踊り」をはじめ、他地区には類を見ない数多くの郷土芸能が受け継がれている。



写真3 小学生に継承された伝統芸能

さらに、生活改善グループ「たいまきオパン」は、地元農産物を使った加工食品の研究・開発及び生産・指導を行っており、「味噌」や「ふくれ菓子」といった加工品を復活させ、市の農林水産祭等や現和物産館において販売している。この取組は、西之表市の女性に波及しており、特に評判の高い手作り味噌の作り方を習うため、西之表市全体で年間約100名の女性が「現和活性化センター」を訪れている。

女性同士が味噌作りや「かるかん」などのお菓子作りを行うなど、伝統的な食品加工のノウハウを勉強し合うことにより、食文化の後継者の育成にも大きく貢献している。

(3) 保育園の運営や年長者を敬う地域づくりなどによる社会福祉の充実

市の方針により、地区の公立保育園が平成23年度末をもって廃止されることとなったが、地元から地域活性化のためにも残すべきとの声が上がったため、現和校区の住民だけで構成される「社会福祉法人現和会」を平成24年1月に設立し、同年4月から「現和みどり保育園」を運営している。

この取組により、地元の子どもは地元が育てるという気運が高まっており、隣接する高齢者福祉施設の高齢者と幼児との交流活動等によって住民の一体感が育まれている。

また、「校区高齢者支援協議会」による高齢者に対するサポートを年5回、さらに毎年1回「校区90歳以上自宅訪問」を実施し、年長者を敬う地域づくりを実施している。



写真4 現和みどり保育園

(4) 現和中学校跡地の活用

廃校となった現和中学校の施設については、現和校区と西之表市が協力して利用者を探した結果、「特別養護老人ホーム現和苑」と六次産業化法に基づく事業者の「農業生産法人種子島共同ファーム」が有効活用している。

このことにより、高齢化対策の充実という社会福祉面での効果が生じるとともに、「農業生産法人種子島共同ファーム」の設立により、校区内の農産物生産増加、消費拡大及び雇用増加という効果も生じており、地域の活性化につながっている。